



授業レポート

鑑賞作品への “Answer Art”を つくろう!

北海道教育大学附属釧路中学校

更科結希^{くし}先生 × 2年B組^{しゅう} (生徒数33名)

生徒を乗せたバスが向かったのは、学校から20分ほど離れた釧路市立美術館。今回の授業は、ここから始まる。館所蔵の作品を鑑賞し、そこから読み取ったメッセージへの返答となる作品、“Answer Art”を制作するのだ。

鑑賞する作品は、日本画家・市成^{いちなり}太煌^{たいこう}の「森の話(2)」。館内に足を踏み入れ、フクロウのいる湿原の風景が描かれた絵を前にして、その静謐^{せいひつ}な雰囲気^{ふんいき}に息をのむ生徒たち。彼らがどのようにこの作品を捉え、それをもとにどのような作品を生み出すのかを追う。

■ 第1時

作品の声を聴こう

「前に予告したとおり、これから、『鑑賞した作品への返答となるAnswer Artをつくる』という授業に入ります。今日は、みんなのために作品を用意してもらいました。まずは、よく見てみてください」。更科先生の声で授業は始まった。静けさのなか、生徒たちはじっと絵を見つめ、全体から受ける印象についてワークシートに書き込んでいく。隣どうしでのやり取りを経て挙げられたのは、「フクロウの表情などに寂し



この授業のためにしつらえられた作品をみんなで囲み、対話による鑑賞を行う。

さを感じる」「全体的に暗いイメージ」「夜なのか朝なのかわからなくて不思議な感じ」といった印象だ。

先生は、今度は絵の中に具体的に描かれているものへと、生徒の目を向けさせていく。「何が描かれている？」という問いに、「フクロウ」「森」「川」「エンレイソウ(※)」と答える生徒たち。「月」か「太陽」かで迷う子の発言をきっかけにして、みんなでさまざまな考えを出し合う。ここで、先生が切り出す。「近くでも見てもらいたいの、順番に前に来て、見てみてください」。

生徒たちは、絵に近づき、まじまじと鑑賞する。そして、気づいたことを全体で共有していく。先生は、個々の言葉を受け止め、さらに深める問いを重ねていく。発言はゆっくりと、作品の主題に迫ろうとするものへと変化していった。

※エンレイソウ ユリ科の多年草。なかでもオオバナエンレイソウは、北海道に生育する。

授業展開(全9時間)

生徒の活動

第1時:鑑賞

“鑑賞作品”を鑑賞する

- 釧路市立美術館で「森の話(2)」を鑑賞する。
- 対話をしながら、作品に描かれている内容・メッセージを読み取る。

第2・3時:発想・構想

Answer Artの構想を練る

- 作品から感じたことや考えたことを想起し、返答したいメッセージをまとめる。
- 返答したいメッセージをもとに、作品の構想を練る。

第4～8時:制作

Answer Artをつくる

- 材料や用具の特性を踏まえ、意図に応じてそれらを使い分けるなどして、自分の表現方法を追究しながら表現する。

第9時:発表・鑑賞

他者の作品を鑑賞する

- 他者の作品を鑑賞し、美術作品のもつ価値や作者の意図について理解を深める。

指導計画

準備するもの

生徒 筆記用具、自分の作品に必要な材料
教師 端材・紙粘土・画用紙など各種素材、加工・接着・着色のための各種用具

学習目標

- 鑑賞作品から感じたことや考えたことを基に自らが表現したいことを構想し、構成を工夫しながら創造的に表現することができる。

評価規準

- 主題などを基にして、主体的に構成を練ろうとしている。(美術への関心・意欲・態度)
- 材料や用具の特性などを生かし、工夫して表現しようとしている。(美術への関心・意欲・態度)
- 主題などを基に想像力を働かせ、形や色彩の効果を生かして、省略・強調などを考え、創造的な構成を工夫して、表現の構想を練っている。(発想や構想の能力)
- 自分の意図に合う新たな表現方法を工夫するなどして創造的に表している。(創造的な技能)
- 造形的なよさや美しさ、表現の工夫について思いや考えを話し合い、対象の見方や感じ方を広げて鑑賞している。(鑑賞の能力)

——特集——
鑑賞から
主題を
生み出す

美術での学びをより深いものにするために、表現と鑑賞の指導の関連を図ることが求められています。しかし、それは具体的にどのような授業によって実現されるのでしょうか。その一つの在り方として、鑑賞作品から受け取ったメッセージへの返答となる作品をつくる、という授業をご紹介します。

生徒1「近くで見ると、フクロウの目の力が強い。何か問いかけている感じがします」

生徒2「なんだかすごく『見られている』みたいな感じ」

先生「フクロウは何を見ているんだろう。視線の先に何があると思う？」

生徒3「何かに焦点を当てているのではなく、心がないかのように、ぼうっとしている」

生徒4「普通なら目は白く輝いていそうなのに、黒で塗りつぶされていて、少しおかしい」

生徒5「遠くを見ているような気がする。力が入っていないくて悲しげ」

生徒の多くは、フクロウから悲しげな印象を受けたようだ。その後も、2羽のフクロウの関係性や状況について意見が交わされていく。そんななか、一人の生徒が「フクロウって、木の上にいるイメージがあるけれど……」とつぶやいた。先生はそれを受けて、投げかけた。

先生「でも、絵の中では地面に降りている。どうしてだろう」

生徒6「この2羽は夫婦。誰かに子どもを連れ去られて、飛び立てないでいるんだと思います」

生徒7「近くに水があるので、水を飲んだ後なんじゃないか」

生徒8「フクロウの下にあるのは木。人間の環境破壊で倒れた木をフクロウは見ている」

先生「それぞれに違う意見があるね。では、少し視点を変えて。ここに描かれていない森の奥って、どうなっているんだろう」

生徒9「同じように森が続いている」

生徒10「奥の方は、人間が作り出した、電気のある明るい世界」

生徒11「手前は全体的に暗いので、悲しげで現実的な感じ。奥は明るいので、理想みたいな感じ」

生徒12「何も無い、ただの草原」

生徒たちの頭の中に、しだいに物語が立ち上がっていく。ここで先生



「森の話(2)」市成太煌
紙本彩色(岩絵具・ニカワ／和紙)
175×136cm 1973年

が告げる。「みんなは、ここからどんな世界を想像するだろうか。そして、これにどんなメッセージを送るだろうか。残り時間はあと10分。じっくりと作品を見てください」。

近づいたり、離れたり、生徒たちは自分の見方で作品と向き合い始める。「奥の空間が目立つ」「水の流れはどうなっているんだろう」などと、友達と自由に意見を交わし合いながら、彼らは、作品の中にそれぞれの世界を見いだしているようだった。



左／席を立ち、作品を間近で鑑賞する生徒たち。
上／エンレイソウを知らない生徒もいる。その話題が出たとき、先生は資料を見せながら簡単な説明を加えた。
右／ワークシートを書いている間はこまめに生徒に声をかけ、印象や感想を引き出していく。

第2・3時

伝えたいことの構想を練ろう

ここからは、美術室へと場所を移しての授業。更科先生は、鑑賞作品を印刷した模造紙を貼り出しながら言う。「今日から、Answer Artの制作に入ります。Answer Artとは、返答としての作品のこと。みんなが受け取ったことに対して、どんな返答をしたらいいだろう。それを考えながら、構想を練っていきましょう」。

まずは「鑑賞作品から受け取ったこと」と「鑑賞作品に伝えたいこと」をワークシートに書く。しかし、「作品へ返答する」という概念を捉えることは、生徒にとって思いのほか難しい。先生は、「手紙」を想起させながら導き、返答したいことをカードに書いて黒板に貼るよう指示した。「自然の豊かさ」「光」「希望」「環境」「現代社会」……。黒板に並んだ言葉全体で共有する。

今回、先生は、作品の素材、使用する画材、平面・立体の選択を、生徒自身に考えさせることにした。ただし、大きさは縦・横・高さ20cm程度を目安とする。限られた条件の中でよりよい表し方を追究し、自ら選択させることがねらいだ。

「では、アイデアスケッチに入りましょう。今回は、素材も各自準備してもらいます。ただ、今の時間に素材からイメージしたい人は、このテーブルにいろいろと用意しておいたので、ここで見たり触ったりして考えてもいいですよ」。教室中央のテーブルの上には、作品づくりに使えるようなものが所狭しと並べられている。そこで素材を手を考える子、席についてスケッチに取り組む子、生徒は



アイデアスケッチを見せながら、自分の作品についてグループのみんなに説明をする。

それぞれに構想を膨らませていく。先生は、必要に応じて生徒の手を止め、過去の授業での先輩のスケッチや作品を見せながら助言することも忘れない。

スケッチがだいたい描けたところに、先生から声がかかる。「一度、グループで話し合いましょう」。4人グループでスケッチを見合い、アドバイスをし合うのだ。教室に、生徒たちの声が広がる。どの子も、友達のスケッチに目を落とし、より思いが伝わ

る表し方を真剣に考えている。アドバイスを受けた生徒は、うれしそうにそれをスケッチに書き加える。

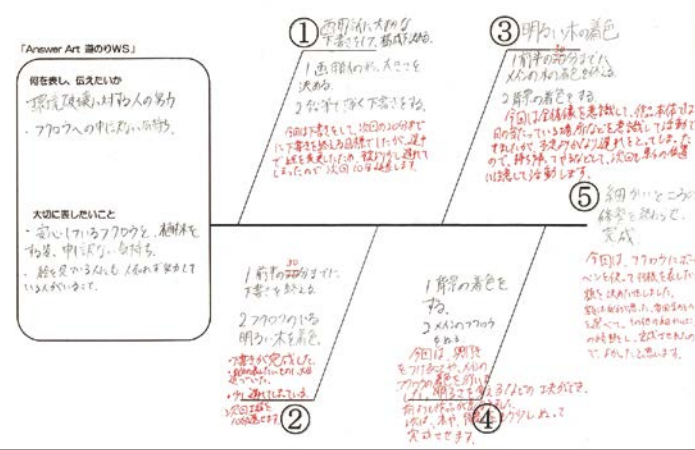
話し合いが終わると、先生からの指示。「今回は、制作の手順も自分で考えていきましょう。それも含めて学習だよ。制作時間は5時間。1時間ごとの計画を立ててください」。生徒たちはとまどいつつも、隣の子と相談するなどして取りかかる。次回から、制作が始まる。



上／マグネット付きのカードを黒板に貼る。
左／素材を見たり触ったりしながらイメージができるように、先生が用意した。



「特集」
鑑賞から
主題を
生み出す



「特集」
鑑賞から
主題を
生み出す

制作状況を見直し、変更点が書き込まれたワークシート。

第4～8時 見通しをもって表現しよう

「実際の制作は、計画どおりにいかないもの。でも、ワークシートに書いた『大切に表したいこと』は必ず実現してください。そこはこだわるところ」。更科先生の声とともに、生徒たちは、自分で決めた手順に沿って、Answer Art の制作を始める。

表したいことによって、必要となる素材や用具、その扱い方は違ってくる。制作にあたっては、それらを適切に選択することが重要となるが、これがなかなか難しい。着色や接着の手段、質感、大きさや位置関係など、制作を助ける知識を、先生は、毎時間、生徒たちに伝えていく。

「周りの人や私に相談してね」と言いながら、こまめに机間指導も行う。目ざすべき「大切に表したいこと」があるから、先生に助けを求めるときの生徒の相談は明確だ。先生は、美術室にあるものの全ての中からもっとも適切な素材・方法を示し、生徒に助言する。クラスの関係性ができているのか、生徒どうしでの相談も自然に行われている。

いっぽうで、時間配分を考えながら制作することも重要だ。先生は、毎時間、授業終了前に5分間、手順の振り返りのための時間を必ず取るようにした。生徒は、ワークシートを見ながら1時間を振り返り、成果と

課題、次回以降の計画の変更点を色ペンで書き加えていく。この繰り返しにより、彼らは回を重ねるごとに、その時間に行うべき作業とその手順、用具をイメージしてから制作に入ることができるようになっていった。

* * *

さて、制作開始から2時間目のこと。先生はさりげなく、こんな大発表をした。「今回、完成したみんなの作品を、生涯学習センターで展示するからね。美術館で鑑賞したあの作品と一緒に」。教室に、大きなどよめきが起こる。この日、「伝えたい」「表したい」という生徒の気持ち、またひとまわり大きく膨らんだように見えた。



第9時 友達の作品の声を聴こう

いよいよ完成した Answer Art を発表・鑑賞する。4人グループになって、一人ずつ作品について解説し、感想をもらう。生徒は皆、生き生きと自分の作品について語り、友達の作品を鑑賞する。鑑賞作品という共通の出発点があるため、友達が表現したいことも捉えやすいのだろう。

その後、全体で今回の学習を振り返る。生徒からは、「一人一人の作品がまったく違っておもしろかった」「他の人の作品を見て、もとの絵の印象がまた少し変わった」という声上がる。「この後、あの作品と展示することで、本当にみんなの Answer Art が完結すると思います。ぜひ見に行ってください」と、先生。生徒は満足げにうなずいた。

- A 理想と現実という二つの世界を表そうと、瓶の中に入れる芝生シートに色を塗って2色に分ける。
- B 「希望への道」を表現するため、紙でメガホン状のトンネルをつくり、その入り口にライトをつける。
- C 人間と動物を隔てる壁に見立てたアクリル板に傷をつけることで、両者の一体化を表現。
- D フクロウの不思議な目や森に染まろうとしている気持ちを、針金を使って表す。

私の “Answer Art”

S君



人工とは

人工物と自然物を融合させた作品です。もっとも伝えたいことは、人工の在り方です。自然を壊す人工ではなく、自然を保護する人工であってほしいと思ってつくりました。フクロウの下には自然を表す石(意思)、羽のところには人工を表すプラスチックを使っています。

Oさん



あたたかく包み込んで

絵の中のフクロウを初めて見たとき、「悲しそう」「寒そう」と思いました。だから、この作品には、「自然の豊かさでフクロウをあたたかく包んであげたい」という思いを込めました。緑色の羊毛を何色も組み合わせて、ろうそく型のライトを使い、あたたかさを表現しました。

T君



現代社会

「現代社会」をイメージしてつくりました。自分は、フクロウの視線や背景などから、「人による自然破壊」を想像しました。あの絵にはまだ緑もありますが、今の世界では枯れ木だけの森もあります。そんな現状を伝えるために、コンテだけを使って暗い枯れ木を描くことにしました。

Tさん



森

伝えなかったことは、森のあたたかさです。そのため、フクロウを草でつくったり、緑で囲んだりしました。また、上を向かせることで、気持ちが上向きになっていることを表しています。土台のフクロウの周りに草をつけて巣を表し、居心地がよい場所を表現しました。

Yさん



Darkness and Shining

あの絵のフクロウの目に、悲しげで何も考えていない感じを受けました。だから、つらくてもその先には光があることを伝えようと思いました。明るさを表現するためにたくさん色を使い、飛んでいる2羽のフクロウをつくりました。白い羽は、「飛べるように」という願いです。

Kさん



希望の居場所

2羽のフクロウは、行き場がなくて悲しそうに見えたので、希望をもってほしくて作品をつくりました。中心には紙コップと竹ひごでつくったおりが、周りには木などがある自然の世界と、紙のビルなどがある人間の世界があります。おりの中にはフクロウがいます。



美術館との連携

今回、更科先生は、地元の釧路市立美術館に協力を仰ぎ、連携しながら授業を行いました。同館学芸員・武東祥子^{ただけだばしょうこ}さんにお話を伺いました。

未来へ文化の種をまく

当館では、子どもたちに作品を見てもらうための事業に力を入れてきました。そこへ、更科先生からいろいろとご相談をいただき、「美術館でできることは協力する」という関係が生まれました。

“Answer Art”という授業のコンセプトを聞いて思ったのは、「ぜひ、実物を鑑賞してもらいたい！」ということ。作品の迫力や質感は、印刷やデジタルデータでは再現できません。送迎バスや鑑賞スペースの確保のため、先生と密にやり取りを重ね、授業の準備をしました。

鑑賞作品は、この地域の景色を描いたもの。釧路の子どもたちにはきつと親近感をもってもらえるのではと、

先生に提案しました。一つの作品をじっくりと鑑賞するなんて、普段はなかなかできません。これをきっかけとして、子どもたちが他のフクロウの作品に興味をもったり、美術館に足を運んだりしてくれたらこんなにうれしいことはありません。

未来へ文化の種をまく。そんな思いで、取り組んでいます。
(談)



釧路市立美術館
学芸員の武東さん



授業終了後、釧路市生涯学習センターの市民展示ホールにて、5日間の会期で開催された「Answer Art展」。鑑賞作品「森の話(2)」と生徒がつくった作品が一堂に会した。多くの来場者が訪れ、作品を鑑賞し、それに対する「返答」を感想ノートに残した。

釧路市立美術館

市民の生涯学習の拠点、釧路市生涯学習センター(まなぼと幣舞)に併設されている。小・中学生や高校生の美術館鑑賞を推進するため、バスでの送迎と学芸員による作品解説・実技講座などのプログラムを積極的に展開している。

授業を終えて きっかけをどう演出するか

「子どもたちが自ら主題を生み出せるようにするには、どうしたらよいだろうか」。本題材を構想する際に自分へ投げかけた問いです。「表したい」と思えるきっかけをどう演出しようか考えていたとき、釧路市立美術館所蔵の一つの作品に出会いました。なじみのある植物に囲まれたフクロウに、物語性を感じました。

鑑賞では、感じたことや考えたことを仲間と共有し、作品の理解を深めることによって、それぞれの考えを生み出していきます。それを起点にして、「鑑賞作品に返答する」と

いう表現ができないだろうかと考え、本題材を計画しました。実際の授業では、作品の表現の主題を想起できるような鑑賞時の発問構成、自分の表したいことに合わせて素材や表現方法を選択できるような制作時の環境整備に力を注ぎました。

授業を終えて、仲間のアドバイスを真摯に受け止め、よりよい表現を目ざす子どもの姿勢に、仲間と共に未来を創造していく力強さを感じました。作品展では、多くの市民の皆様から、Answer Art への返答をいただきました。それを子どもたちに



更科結希
さらしな・ゆき

北海道生まれ。北海道教育大学附属釧路中学校教諭。北海道教育大学卒業後、北海道釧路町の公立中学校教諭を経て、2012年4より現職。2015年、北海道教育大学大学院修了。

返したときの「いい顔」は忘れられません。そんな顔が続く授業を今後とも展開したいと考えています。

授業を参観して

光村図書中学校『美術』の著作者である山崎正明先生に、今回の授業を参観していただきました。



山崎正明
やまざき・まさあき

北海道生まれ。北翔大学教授、元千歳市立北斗中学校教諭。北海道教育大学札幌校卒業。埼玉県で講師を務めた後、北海道の公立中学校教諭に。全国大学造形美術教育教員養成協議会事務局。自身のブログ「美術と自然と教育と」で、授業実践や生徒作品などを紹介している。光村図書中学校『美術』教科書の著作者を務める。

学び合い、高め合う 美術の授業

更科先生の授業を参観するのは、毎回とても楽しみでした。生徒たちがあらゆる場面において、仲間と共によりよいものをつくりあげようとする意欲にあふれていたからです。生徒どうしが、ごく自然に、他者に意見を求めたり、感想を述べ合ったりする。「主体的・対話的で深い学び」の姿がそこにありました。それは、教室の中で一つの理想的な社会が成立しているかのようでした。

このような学びの姿を生み出した最初のしかけが、第1時の鑑賞活動です。生徒への問いかけとして先生が選択した作品「森の話(2)」は、北海道らしい風景が描かれていることから身近に感じられ、かつ物語が生まれやすいものでした。作品の選択は非常に重要です。そのうえでの「対話による鑑賞」ですから、発言も活発になります。こうしてさまざまな見方や考え方を共有する中で、生徒たちは作品の中に自分なりの意味や価値を生み出していくおもしろさを感じ取っていました。

次に、この作品から受け取ったことに対する返答を、今度は自分が作品で表現するわけですが、授業ではその表現方法や材料、さらには制作手順も生徒が決めるようになっていました。活動の中に選択・意思決定

の場面をつくることは、学びを主体的にしていきます。時間の配分も重要です。今回の授業では、発想・構想の段階がとても丁寧に扱われていました。最初の鑑賞が発想の段階の一部になっていて、その後、構想のための時間を2時間保障しています。これは「自分の主題」を明確にするために必要な時間です。また、一つの題材で多様な表現をする授業では、教育活動全体を通した計画に加え、その学びを支える「教室の環境の構成」も欠かせません。美術室にはさまざまな材料や用具、機器や資料が十分に整備されていました。

3年間の美術の時間の中間点である2年生のこの時期に、鑑賞と表現の関わりについて深く考え、美術に対する感じ方や考え方を広げ、深めたことによって、今後の生徒の学びはより充実していこうと期待できます。

そして、この実践のもう一つの大きなポイントは、更科先生が、釧路市立美術館学芸員の武東さんと相談して鑑賞作品を選び、校外での作品展にまでつなげていたことです。地域の資源を有効に活用しながら子どもを育てつつ、地域の文化も大切にするという意味で、その取り組みはたいへん示唆に富むものでした。このような実践が全国各地で行われたならば、美術教育の可能性はますます広がっていくことでしょう。



「特集」
鑑賞から
主題を生み出す